

大統領の

クリスマス

ツリー

鷺沢
萌

Megumu Sagisawa



大統領の
クリスマス
ツリー

鷺沢
萌

Megumu Sagisawa



だいとうりよう

大統領のクリスマス・ツリー

一九九四年二月一日 第一刷発行

著者——鷺沢萌

©Megumu Sagisawa 1994, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二

郵便番号 一一二―〇一



電話——出版部 〇三―五三九五―三五〇四

販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

定価——定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-206913-X (文1)

大統領のクリスマス・ツリー

装画・装幀
山口昌弘

——これがね、大統領のクリスマス・ツリー……。

治^{はるさ}貴^きのそのことばは今でも香^{きやう}子^{うと}の耳の底に残っていて、だから香子はいつだってそのフリーズを心の中で聞くことができる。

アメリカ合衆国の首都であるこの町で暮らしはじめてから、何年が経つのだろうか。メモリアル・ブリッジを渡ると真正面にリンカーン記念館が見えてきて、この夜景はDCの中でも最高だと、昔ロズリンに住んでいたころ、友だちとよく言っていたのを思い出しながら、香子の気持ちはさっきからずっと揺れている。この町で何年を過したのかも、だからうまく数えられない。そうしてそれを思えば、その何年間かというものの香子は脇目もふらずにただ「暮らす」ことに一生懸命で、今年が何年目だなんてことは考えたことがなかったのかも知れない。

黒い水面を、ときおり夜の光を反射して光らせているポトマック川の上に、白っ

ぽい欠片^{かけら}がゆらゆらと踊ったのが見えたような気がした。

「あ……」

思わず香子が声を出すと、気遣わしげな治貴の視線が感じられる。さつきからこの人はずっとこんなふうに、あたしに気を遣ってばかりいる、と香子は思う。

「どうしたの」

治貴が言う。この声が、香子は好きだ。世界中の他の誰も、こんな声で話しかけてくれない。そう考えると胸の奥にさつき見た雪の欠片がヒラヒラと通りすぎる。

「雪……だと思ったの。でも見間違えね、きつと……」

香子がそう言うと、治貴はハンドルの上に身を乗り出すようにして、フロントガラス越しに上空を見る。

「今日は寒かったからな……。降るかも知れない」

雪が降ろうが降るまいが、治貴にとってはそんなことはどうでもいいことのはず

だ。香子は微笑^{ほほえ}みを洩^もらすとカーラジオのスイッチを入れた。

——車を停めてよ、どこへでもいいから停めて。

口に出して言ってしまいたいことばが、ずっと身体の中でぶすぶすと音を立てている。そうしてもし治貴が香子の言うとおり車を停めてくれたなら、香子は治貴の首にしがみついて叫ぶだろう。

——ハルキ！ ハル！ ハル！

ラジオからは昔の曲が流れてきた。イントロに聞き覚えがある。若いときによく聴いたメロディというものは、どうしてこんなにもしつかりと記憶のなかに根づくものなのだろうか。

曲の名前は忘れてしまったけれど、ザ・カーズの曲だ。それは間違いない。治貴も香子も学生だったところに、流行^{はや}っていた曲だった。

結婚してからの年数は、香子にも数えることができる。十年。そうだ、この年末で十一年目を数えるのだ。早い結婚だったけれど後悔したことはない。はじめのう

ちは恵まれた新婚生活とはとてもいえない日々を送っていたけれど、今は郊外の大
きな家での、シープドッグと二匹の猫と四つになる女の子とに囲まれた暖い家庭が
ある。

治貴が買ってくれたアコードで娘の有香^{ゆか}を幼稚園まで迎えに行ったりするとき、
香子はときどき怖くなることさえある。

——これは夢なんじゃないのかしら。

香子はそう思ってしまうのだ。

若いころ、治貴は香子を車に乗せてよくドライブをした。もっともそれは、ドラ
イヴするのがいばんお金のかからないデートの仕方だったからかも知れない。

フェアファックス沿いの、隣り同士の家が何百メートルも離れているような高級
住宅街を、ドライブ帰りにはよく通った。クリスマスの時期にはそれぞれの家の飾^{ナメント}
り付けを見るのも楽しみだった。

大きな家々の中のひとつに、治貴の特にお気に入りのお家が合った。前向きに開い

ているような設計の煉瓦づくりのその豪邸には門も柵もなく、ただ公道に面したところから玄関までを芝生の中に敷かれた白い石畳の小道がつないでいた。クリスマスのところには、道に面して備えつけられた銀色のポストの扉に、玄関のドアにぶら下がっているのと同じ形をしたミニチュアのクリスマスリースがテープでとめられていた。たぶん子供が作ったものだったのだろう。

——俺、いつか絶対にこういう家を買ってみせるから。

その家の前を通る度に治貴は言った。

——香子を絶対幸せにしてみせるから。

香子とはときには微笑みながら、ときには真面目な顔で頷きながら、治貴のそんなことばを聞いていた。ギアを握りしめて血の気の薄くなったような治貴の筋ばった拳の上に自分の手をそっと重ねると、突きつめた治貴の表情は少しやわらいだ。

この人ならやるだろう、というような気持ちはそのころからあった。けれど香子が治貴とずっと一緒にいるのはそんなことばを信じたからではなくて、そんなこと

を言う治貴を愛していたからだ。「幸せにする」と治貴は言ったけれど、香子はどうずっと前から幸せだった。治貴と一緒にいられることが、香子の幸せだったのだ。

ワシントン郊外のヴィエナという町に三年前買った家は、あのころよく前を通ったフェアファックスの家に似ている。煉瓦づくりで、広い前庭があって、門も柵もない。

あのころから治貴が欲しがっていた「深緑のレンジ・ローヴァー」は買い替えてもう二台めだし、有香の送り迎え用のアコードも買った。

あのころの治貴と香子が思い描いていた生活を、今の自分たちはしていると香子と思う。何もかもがすべてうまくいったとは決していえないが、アメリカ人にとっても難関である司法試験バー・エンザムをたったの二回めでパスした治貴は日本人だという決定的なハンディをも克服し、今では勤めている弁護士事務所ロイ・ファームで若手のホープと呼ばれるまでになった。

あのころ思い描いていた生活が、現実になったのだ。何べんも自分たちに言い聞かせるように心の中で繰り返したが、それでも香子はときどき思ってしまうのだ。

これは夢なのではないか、と。すべて空想の中の出来事なのではないか、と。

ラジオから流れてきていたザ・カーズの曲がフェイドアウトして、その上にうるさいDJの喚き声わめきこゑが重なった。香子は顔をしかめてラジオの音量を絞り、それからふと顔をあげて呟くように言った。

「あ、思い出した」

小さな声で言ったのに、運転席の治貴は弾かれたようにこちらを向いて言う。

「何を？」

「この曲のタイトルよ」

「……………」

「たしか『ドライヴ』っていうんだった。今夜は誰がお前を送っていくんだ？　つていう歌じゃなかった？」

治貴は首を傾げ、「さあ……」と曖昧あいまいな感じで言った。香子もそれ以上追い訊ねはせず、背中をシートに戻す。

治貴の運転するレンジ・ローヴァーはケネディ・センターを抜けて間もなくヴァージニア・アヴェニューにぶつかる。左へ行けばジョージタウン、右へ行けばモールだ。どちらに行くんだろう、とふと考えた香子は思わず苦笑を洩らした。

——どちらだっていい……。

もともと今夜のこのドライブに目的地があるわけではない。その点では若いころよくふたりで楽しんだドライブと同じだ。

そういえば、はじめて治貴と会った日も、こんなふうに車で夜のこの町を走ったのだった。

——ハルは憶えてる？ あの子のこと。

口に出して言いたいひと言を、香子はまた身体の中に押しこめた。

*

香子が始めて治貴に会ったのは、香子が十九歳、治貴がひとつ年上の二十歳のときだった。香子は西海岸の大学からワシントンの学校に転校してきたばかりのころで、治貴はジョージタウン大学の二年生だった。

ワシントンに住んでいる日本人留学生は今も少ないが、そのころはもつと少なくて、だから治貴ともワシントンに来て結構すぐに知り合うことになった。香子と同じ大学の日本人学生のアパートで何人かが集まって食事をしたときに、治貴も来たのだった。

ワシントンには来たばかりなのだと香子が言うと、治貴はへえ、と香子の顔を覗きこむようにした。

——じゃ、観光名所みたいなのは、全然見てないでしょ。

——観光名所？　ワシントンにそんなものあるんですか？

——ホワイト・ハウスとかキャピトルとかモニュメントとかさ。

——ふうん……。

——あとペンタゴンだろ、スミソニアンだろ、アーリントン墓地とか結構気色悪くていいぜ。

——詳しいんですねえ、ずいぶん。

呆れたように香子が言うと、治貴はニコツと笑った。そんなふうに笑うと治貴の顔はシワだらけになった。

——バイトでガイドやってんだよ、俺。

そのことばに、香子も思わず笑った。詳しいわけだ。

どこに住んでいるのかと訊かれたのでロズリンと答えると、じゃあ帰りに送りがてら、モールのほうを廻ってあげるよ、と気軽な感じで治貴は言った。

——いつも思うんだけどさ、モールは日中じゃなくて、夜見るほうがおトクなん

だよね。

友人から安く買いうけたというポロポロのシェヴィー・ノヴァの中で、治貴は言
った。

——どうして？

——いろんな建物がライトアップされるからさ、夜見るほうが綺麗なんだよ。

それは治貴の言ったとおりだった。国会議事堂キヤピトルにしろワシントン記念塔モニメントにしろ、
何十何百という電球に下から照らしあげられたものが白い肌に光を映している様
は、どこかで見たことのある絵葉書そのものの姿だった。

うわあ、と香子も思わず感嘆の声を洩らし、それからあとに続くことばを口にし
かけて途中で止めたや。そんな香子を横目で盗み見るようにしながら、治貴は苦笑し
た。

——電気代がもったいない、って言おうと思った？

香子は目を見開いて治貴の横顔を見つめ、どうして？ と訊ねた。

——バイトでガイドやってるって言ったろ？　日本から来るツアーのおばさんたち
がさ、よくそう言うんだよ。

——失礼ね、おばさんと一緒にしないでよ。

——でもそう言おうと思ったでしょ？

香子は口ごもった。

——半分は当たってるけど……。

——けど？

——こういうところにお金惜しまないところが、あたしは好きなの。

「アメリカを」という目的語を省いて言った。すると治貴は光る目でちらりと香子
を見、低い声で「うん、俺もだな」と言った。

治貴の目の色の深さにはじめて気付いたのはそのときだった。右目ははっきりし
た二重、左目は奥二重で両方の大きさが違う治貴の目は、底のないような色をして
いた。普通の男の子と同じように軽い調子でふざけたり大きな声を出して明るく笑